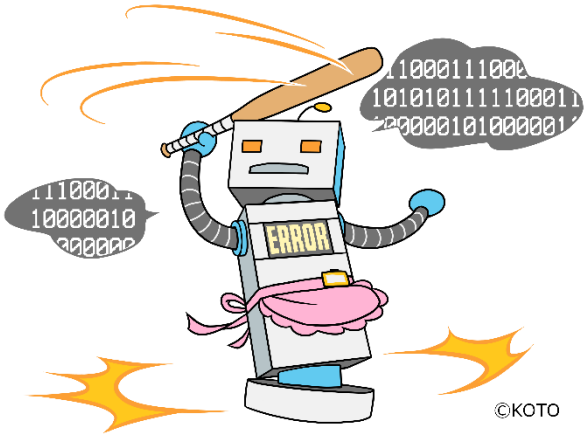
# コンピュータシステムダウン

関西大学　社会安全研究センター　小澤　守

先ごろウィンドウズ用のセキュリティソフトのアップデートに起因する世界中で大規模なシステム障害が発生した．世界中のパソコンはマイクロソフトかアップルか，2社による完全な寡占状態にあり，それに合わせて様々なセキュリティソフトが販売されている．中でも今回の主役は米国のサイバーセキュリティの専門会社であるCrowdStrike製のソフトで，世界でトップシェアを誇るものらしい．最近，クラウド，綴りはCloudでCrowdとは異なるが，を利用して，実際にアプリケーションソフトを持たないでもインターネットを通じてアクセスするだけで様々なサービス（クラウドサービスというのだそうだ）を受けられる状況になっている．身近なものではGmailやHotmail，OneDriveなどがそうで，OutlookやBecky!などはクラウドではないのだそうだ．筆者などは，個人的に蓄積してきたデータなどはほとんどすべてパソコンやハードディスクに格納し，あまつさえ印刷製本して確保しているものも少なくない．そんな絶滅危惧人種でも，最近の状況では，知らず知らずのうちにいつの間にかクラウドを利用しているようである．

航空券の予約や銀行のATMなどいわゆるビッグデータを扱い，また企業で働くビジネスマンは，取引先に出かける際に漏洩が心配になるようなデータは持ち歩かないようだ．必要な情報はインターネットを通じてというか，すべてネット通信を介してのみ見ることができるといった状況が一般的であるという．クラウドサービスに係るセキュリティソフトに問題があるとすれば，シェアが高いものほど世界的にインパクトが大きいのは当然である．世界中のデータ，病院患者の医療データや処方箋など人命にかかわるデータもお金の流れも含めて，ネット上にあるすべてが影響を受けることになる．いつでもどこでも閲覧があるいはデータ取り出しや更新が可能ということは非常に効率的であり便利であるのはこの上ないが，一方でいったんそのようなシステムがダウンするとたちまち何もできなくなり，社会のすべてが停止するという非常に大きなリスクを背負っていることになる．

最近，仕事の関係で，新規研究プロジェクトの申請書を読む機会があった．そのうたい文句に「〇〇〇のDX化」というのがあった．DXとはご承知のようにDigital Transformationの略で，世の中DXであふれている．DXであらざれば新たな研究ではないかのような風潮なのだろう．しかしDXはAIやIoTを通じてより良いビジネスや生活環境を構築しよう，社会変革を起こそうというものであり，その手段としてあらゆるものをデジタル化してAI，IoTが活用できるようにしよう，言い換えれば我々の生活をコンピュータやネットワークでもってもっと豊かなものにしようということと思われる．その点，件の「DX化」はいかがなものだろうか．何を目指してどのようなものに変革し，どのような世界を展望しようとしているのか，皆目わからない．時流に乗ってDX化と標語のように掲げているに過ぎない，と公の場でついコメントしてしまった．隣にいた同僚からは「そんなことを言えるのはあんだだけだ」と感心（呆れかも）されたのである．

第4次産業革命などと高らかな標語の下で，DXを推進するのもいい．ただし，

利便性効率性と同時に大きなリスクを背負っていることへの理解が不可欠である．時には飛行機が飛ばないことや病院で診察が受けられないこともありうることを許容しろというのではなく，そのような折にも対応できるバックアップ体制を構築しておくことが肝要．DXであろうがクラウドであろうが，あくまでもバーチャルであり，失敗学で有名な畑村洋太郎先生が提唱された3現主義,「現地に赴くこと」,「現物を観察すること」,「現場にいる当事者から話を聞くこと」をサポートするものであるにすぎないのである．筆者はこれに「現時」を追加したい．なぜならコンピュータの2次元画像ではなく3次元空間で，なおかつ時間発展のある時空間の中に，我々人間を含む自然があるからである．